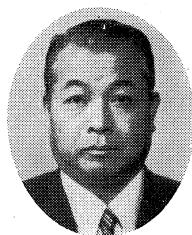


# 雑感

隨想

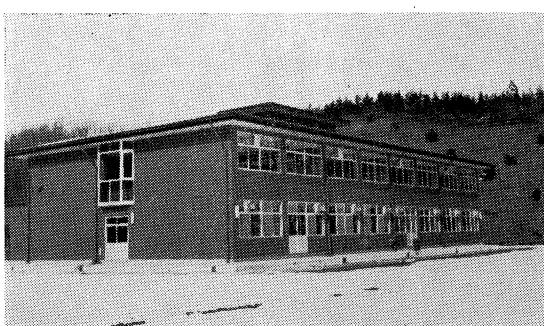


村田三郎

鮫川分校に赴任して一年が過ぎた。教員生活三十年のうち、分校勤務ははじめてであった。三学級七十九名の生徒、鮫川村出身者がほとんどである。職員は九名、全県で最も小さい高校で、校舎は木造、歩けばギシギシする。

休み時間、昼食時、放課後、職員室にはぎやかである。このようなことは今まで経験したことがなかつた。連絡や相談、雑談等に最初とまどつた。言葉づかい、先生に対する接し方、これでよいのだろうか、一学期に何回か話し合いを持った。はつきりした結論が出たわけではなかつたが、もつと“はじめある生活”に、そして“家族的雰囲気を大切に”して指導することになつた。

夜の会合も多い。P.T.A.、保護委員会、同窓会等、地域の実態を考慮するトやむをえない。授業や部活動以外の事務量も多い。ほとんどの先生がタブを打つ。一台の古いタイプはフル回転である。たつた一人の女子教員は新



新装なつた校舎

(福島県立東白川農商高等学校  
鮫川分校長)

卒で来客の接待に多忙である。そのうえ、保健主事の仕事も兼ねている。少人数の職員であるからこそ互いが協力しあつて、学校運営をしなければならない。先生方はそれぞれに与えられた分担を責任をもつてすべてやり上げる。全く頭の下がる思いである。

多くの卒業生が訪ねてくるのは驚く。お盆、正月、連休時には特に多い。遠く離れてみると、家族的な学校がなつかしいのだろうか。

× × ×

で、もっと進学率を高めたいと思う。鮫川分校で学んでも十分に進学できるし、立派に就職できるんだ、という学校に私たちは努力していくなければならない。これが分校の使命ではないかと思う。

普通科ではあるが、就職する者が大半である。そのため職業教科も取り入れたカリキュラムを編成している。進学者は、毎年二名から三名である

新しい校舎で新学期をスタートして二ヶ月が過ぎた。すばらしい校舎である。県当局のご理解は勿論であるが、初代分校長でもあつた石田村長はじめ村の方々の特段のご協力で、村民グランドの一角に校舎が完成した。図書室や視聴覚室、実験室等、そしてグランド、生徒たちは満足げに、學習に、スポーツに励んでいる。

× × ×

今年もまた、数多くの卒業生が訪ねてくれて、あの元気のよい姿を見せてくれるだろうか。今から楽しみである。